

## 名誉総裁 年頭挨拶



新年明けましておめでとうございます。

本年も、全国の救難所員の皆様が、  
海上における、人命、船舶の救済に力を尽くし、  
海上産業の発展と海上交通の安全確保に  
寄与されますとともに、  
国民の皆様から益々信頼され、  
発展を遂げられますことを願っております。

平成25年1月1日  
公益社団法人 日本水難救済会  
名誉総裁 憲仁親王妃久子

## 年頭挨拶



公益社団法人 日本水難救済会  
会長 相原 力

平成25年の年頭にあたり  
海上の安全と安心のための  
皆様のご活躍を祈念申し上げます。

平成25年の年頭にあたり、全国の救難所・支所の救難所員とその活動を支えておられるご家族の皆様をはじめ、洋上救急や青い羽根募金活動に携わっていただいている皆様に、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

まず、全国の救難所員等の皆様におかれましては、昼夜を問わず海難救助出動等にご尽力をいただいております。海の現場での救助活動は荒天の中での作業を余儀なくされ、突然、予期しない困難が急に降りかかるなど、救助活動をされる救難所員の方々に危険が迫ることが多く、そのご苦労は大変なことと思います。

日本水難救済会は明治22年の創設以来、平成24年までに救難所員の皆様の活躍により全国で累計195,164人の人命を救助してきた実績を誇っており、昨年は12月末までに全国で366件の海難に対応し、286名、149隻を救助し、沿岸における海難救助に多大な成果を上げることができました。偏に、これまで水難救済に携わられてきた皆様の崇高なボランティア精神に依るものでありますが、今後とも事故防止に留意し活動されますようよろしくお願いいたします。

また、洋上救急は、昭和60年にこの制度が発足してから昨年12月末までに延べ765件の出動が行われております。昨年は24件の事案に対応しましたが、海上を活動の場とする船員やそのご家族の安心をもたらすものとして、関係の皆様からも高く評価されており、今後とも一層の充実を図って参る所存でございます。

青い羽根募金につきましては、昨年は、海上保安庁をはじめ、国土交通省、水産庁、防衛省などの国の機関のほか、各種企業や海洋少年団などのご協力

をいただきました。お陰様で、青い羽根募金活動はもとより青い羽根募金支援自動販売機の設置箇所が増もあり、多大な成果がございました。関係の皆様にお礼を申し上げますとともに、さらなる拡大を期待しているところです。

日本水難救済会は、海上保安庁をはじめ、関係省庁、都道府県、日本財団や日本海事センターその他の諸団体のご指導ご支援により事業を運営しているところですが、全国41の地方水難救済会に所属されています約54,000人のボランティア救助員のご支援のため、本年も的確な運営を推進していく所存でございますので、よろしく願い申し上げます。

地方水難救済会をはじめ、各救難所・支所の皆様およびご家族のご健勝とますますのご発展をご祈念申し上げ、新年の挨拶といたします。





海上保安庁  
長官 北村 隆志

平成25年の年頭にあたり  
謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

(公社)日本水難救済会におかれましては、明治22年の創設以来、崇高なボランティア精神のもと、123年の長きにわたり水難救済事業を展開され、これまでに、約19万5千名に及ぶ尊い人命と約3万9千隻の船舶を救助するなど、輝かしい歴史と伝統を築き上げてこられました。

これも一重に、尊い人命のため、献身的に救助活動に従事されている全国各地約5万4千名の救難所員の方々や、その活動をご支援いただいているご家族をはじめとする関係者の皆様の地道な努力の賜物であり、心から敬意を表す次第であります。

昨年は、香港活動家による魚釣島不法上陸事案、活発化する中国公船への対応等、尖閣諸島周辺海域における海上保安庁の領海警備業務が社会的に注目される一方、10月に発生した沖縄本島南東沖での貨物船火災においては一度に中国人64名を救助する等、的確に船舶海難や海浜事故等に対応してきたところであります。今後も尖閣諸島を巡る厳しい情勢は続くと思われませんが、海難救助は当庁の根幹業務であるとともに人命に直結する業務であるため、引き続き的確に実施していく所存であります。

さて、海上保安庁では、巡視船艇・航空機の整備・高性能化を図るとともに、ヘリコプターからの降下、潜水、救急救命といった救助技術を有した機動救難士を全国の主要航空基地に配置し、捜索救助体制の充実強化に鋭意取り組んできましたが、広大な我が国沿岸域において多発する船舶海難や海浜事故等への初動対応は、官民が連携した救助体制が不可欠であります。

そのような中、全国津々浦々1,200カ所余りに配置され、局地的な地理的環境、気象・海象を熟知し、迅速な救助活動を行う水難救済会の存在は、海で遭難した被災者のみならず、我々海上保安庁にとって

も誠に頼もしく、なくてはならないものです。

また、洋上救急事業におきましても、昭和60年の運用開始から28年目を迎え、通算の出動件数が760件を数える大きな実績を残され、内外からも高い評価を受けているところであります。

これは、制度の創設以来、事業の実施主体であります日本水難救済会、事業の推進にご尽力いただいております関係機関および関係団体、本来業務多忙の中、日夜を問わず、往診等の労にあたっただけでいる協力医療機関の医師・看護師の方々など、関係各位の多方面にわたるご支援と献身的なご協力により成り立っているもので、改めて心から敬意を表する次第であります。

このほか、「若者の水難救済ボランティア教室」の開催や、海中転落事故多発地域に救命浮環を設置する「ライフリング事業」等、地域における海難の予防にも多大な貢献をいただいております。

このような日本水難救済会の関係者の皆様の崇高かつ献身的な活動に対し、海上保安庁といたしましても、全面的に支援させていただくとともに、綿密な連携のもと、海上における尊い人命および財産の救助に万全を期していく所存ですので、引き続き皆様方のご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後に、全国各地において、人命救助という崇高な使命のもと、日夜ご活躍されている救難所員、医師、看護師等関係者の皆様のご健勝と、日本水難救済会の一層のご発展を祈念いたしまして、私の新年の挨拶とさせていただきます。



公益社団法人 日本水難救済会  
理事長 向田 昌幸

真新しきメ縄を押し  
“へび”の如く一皮むいて新たな一步を！

新年 明けまして おめでとうございます。

年頭にあたり、日頃から全国の津々浦々で昼夜を問わず水難救済活動に勤しんでおられるボランティア救助員の皆様をはじめ、捜索救助のプロとして惜しみないご指導ご支援をいただいている海上保安庁および臨海自治体や消防・警察の皆様、そして洋上救急医療事業に献身的にご参画ご協力をいただいている医療機関や海上・航空の両自衛隊の皆様に対し、深く敬意と謝意を表させていただきます。

また、本会が推進する地先沿岸海域における水難救済事業や、遙か沖合海域での洋上救急事業に対し、いつも心強いご賛同とご支援を賜っている海事・漁業関係業界団体はもとより、慈善事業や社会貢献にご理解のある多くの市民や企業、そして医療関係機関の皆様にご心よりお礼申し上げます。

さて、最近では尖閣問題が緊迫の度合いを増してきており、海上保安庁では限られた現有勢力を総動員し組織を挙げてその対応に追われていると承知しています。それだけに、沿岸海域の海上保安体制にも全国的に少なからず影響が出てくるのではないかと懸念されますところ、本会および臨海都道府県の地方水難救済会といたしましても、その分、今年は例年にも増して一段と気を引き締めていかねばなりません。

“ボランティア”と言えば、ラテン語を語源とし、自発的な無償奉仕や自己献身的な活動をする人を指すようですが、わが国でも特に平成7年の阪神・淡路大震災を機に、最近では単に助ける人と助けられる人との個人的な関係の無償奉仕活動だけでなく、企業や団体などの組織的なものや公共的なもの、そして有償や互恵的なもの等々、様々な形で社会に幅広く普及し進化してきたように思います。しかし、そんな中であっても、明治22年に讃岐の金刀比羅宮にて

本会の礎が築かれて以来、長い歴史と伝統を誇るボランティア精神に基づく本会の水難救済活動は、今なおわが国におけるボランティア活動の先駆的で模範的な地位を保っていると自負しています。

東日本大震災からまもなく2年を迎えます。東北地方の太平洋沿岸を中心に多くの救助員の方々が犠牲になられ、各地の救難所も甚大な被害に見舞われましたが、本会の推進する支援事業により、微力ながらも復旧復興に向けた貢献ができましたのは多くの慈悲深い人々の惜しみないご厚情の賜物であり、心から感謝申し上げる次第です。

自然災害の絶えないわが国では、今後いつまた天変地変に見舞われるかも知れません。南海・東南海・東海地震や首都圏直下型地震などにも備えなければなりません。そこで、すでにご高承のとおり、本会では3年前に定款を改正し、日常的な水難事故だけでなく、大規模災害の発生時における災害救援活動を事業の一つに加えております。各地方の水難救済会におかれましては、関係機関と共に地域防災計画の中に名を連ね、日頃から積極的に防災訓練に参画され、災害に備えていただければ幸いです。

今年は中国文化が起源とされる干支(えと)で言えば、へび(癸巳)年ですが、なぜか十二支には海にちなんだ生き物が見当たりません。今の中国は国を挙げて海洋進出を目指していますが、干支を見る限り、古来の中国は海との縁が希薄だったのかもしれませんが、しかし、そんな中国はともかく、日本は島国として古来より海に依って立ってきたはずなのに、干支が日本文化の中に同化していく過程で、どうして海にちなんだ生き物が採用されなかったのだろうかかと、少し残念に思います。そんなことに想いを巡らせつつも、若者の水難救済ボランティア教室を通じ、次世代を担う子どもたちには、本会の素晴らしい伝統である海のボランティア精神を一人でも多く受け継いでほしいものと切望するとともに、皆様と共に繁栄の象徴“へび”にちなんで真新しいメ縄を押し、一皮むいて少しでも大きく成長して参りたいと祈念して、年頭のごあいさつといたします。